
生まれてきて、すいませんとは何事だ！？

なーこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生まれてきて、すいませんとは何事だ！？

【Nコード】

N7148V

【作者名】

なーこ

【あらすじ】

思い出にでてくる人々は、ぼくをかたちづくった人々、ぼくのいちぶだし、ぼくじしんかも。ぼくの思い出は、いやな思い出より、たのしい思い出がたくさんあるよ。でも、こどもの話だから、ちょっと残酷な話もあるよ。げんざい、かこ、みらい？ 思い出のダークファンタジーのはじまりだよ。【不定期更新】

QPジジイ

『QPジジイ』

公園には、乳母車に大量のQPさんに乗せた『QPジジイ』と呼ばれる爺さんがいた。

QPジジイは、子供たちを見かけると、ポケットから飴玉を取り出して、配っていた。

飴玉を受け取った子供たちは、もらった飴玉を、QPジジイに向かって投げつけた。

「くせーんだよ！ おめーの飴なんか食えねーよ！」
「知らない人から、物を貰っちゃいけないんだぜ！」

QPジジイは、酷いことをされても、子供たちを叱らなかった。笑って済ませていた。

そんなQPジジイだが、一度だけ、凄い剣幕で怒鳴った。
乳母車からQPさんを取り上げたとき。あれは怖かった…あんな怖い爺さんは嫌いだ。

そのことを両親に言ったら叱られた。QPジジイは、空襲で、子供を亡くしたらしい。

QPさんは、QPジジイの子供だから、乳母車に乗っているのだ。まあ普通に考えれば、そんな感じだった。

だけれど、次の日から子供たちは、もらった飴玉をQPジジイに投げ続けた。

だけれど、QPジジイが笑っているのだから、あれは、あれで良かったと思う。

だけれど、QPジジイも、子供たちも笑顔だったから、あれで良かったと思う。

皆に隠れて、たまにQPジジイのくれた飴玉を舐めながら、

「皆も隠れて食べてるんじゃないのかな・・・」

と思うと、涙が出そうなくらい甘かった。

ウチのお婆ちゃん

『ウチの婆ちゃん』

僕の人生の一時期、ほんの一瞬のような時間だけど、お婆ちゃんと二人暮らしだった。

お爺ちゃんが亡くなった後、老人ボケを発症したみたいで、一人暮らしは危ないから。

両親は仕事の関係で、なかなか一緒に住めないから、まあ仕方なく一緒に住んだわけ。

よく考えてみてよ。朝も、夜も、晴れてるのか、雨なのかも、解らんお婆ちゃんだよ。

そんなと一緒に暮らしていて、こっちの身がもたねーよ。

「悪いけど、お婆ちゃん、そっちで引き取ってよ……もう無理だから」

「解った、こっちで引き取るけど、もう少しだけ待ってくれ」

「いいや、もう限界だわ」

そんな、お婆ちゃんだけれど、たまに調子が良いときは、夕飯なんか作ってくれた。

年寄りの御飯だから、そんなに口に合わないんだけど、まあ美味しかった気がする。

しかし一回さ、お酒飲んで帰ってきた深夜に、夕ご飯を出されたわけですよ。

そりゃ怒鳴りますよ、外に連れ出して「お婆ちゃん、今は夜中ですよー!」

なんて言っただと思います？」「ああ今日は雨だから、空が真っ暗だね。」と。

んで、お婆ちゃんは、両親に引き取ってもらって。それから半年くらいで亡くなった。

しかし亡くなってみると、色々と手元に思い出も残ってるわけで、寂しいものです。

傘を置き忘れてくる僕のために、お婆ちゃんが貼った『カエル』シールとかね。

そーいうのは、今でも手元にあるわけですよ、色んな傘を置き忘れるクセにさ。

極めつけは、『夕食を冷蔵庫にしまっただけあるよ』ってお知らせするメモ。

『なーこつあん ゆうしょくは れいそうこに あります』

『ちゃん』じゃなくて『つあん』だったのか…どおりで発音がおかしかったわけだ。

結婚ごっこ

『結婚ごっこ』

僕の田舎は、東京都国立市なのですが、『田舎』と呼ぶには都会ですよね。

僕が子供の頃は、木造二軒長屋の都営住宅が立ち並び、立派な田舎でした。

水は冷たく、光化学スモッグと無縁の緑溢れる空き地、便所は汲取りだけ。

二軒長屋のお隣には、一つ年上の女の子が住んでおり、遊んでもらいました。

ロウセキで道路に絵を画いたり、部屋で積み木でお城や牧場を作ったり…

中でも、女の子のお気に入り遊びは『結婚ごっこ』。

遊び方は、簡単です。（以下：ルール説明）

【１】女の子は、寝室で頭からタオルケットを被り、新郎の到着を待ちます。

結婚式に遅れた体で「ごめん、ごめんよ」とか謝るとポイントが高いです。

【２】女の子に「私のこと好き？」と聞かれたら、「はい」と一応答えます。

このとき「いいえ」と言うと「はい」と言うまで女の子は嘔泣きをします。

【3】タオルケットから手の甲を出したら「OK」が出るまでキスをします。

途中で飽きてきますが、ここで「OK」が出ないと初めからやり直します。

ルールは簡単で、とくに用意をするものもない、単純な『ごっこ遊び』なんですよ。

国立周辺で流行してたのか、伝統の遊びなのか、よく解らないけど楽しかったです。

ただ、女の子が唇を突き出して「うーん」とか言ったので、お口にキスしたら、
両親が飛んできて「お前たち何やってるの!!」と、すげー怒られたんです。
ルールを破ったから、怒られたのかな？

木造都営住宅は、翌年の春に取壊されて、女の子も引越してしまいました。

最後の夏の思い出が「すげー怒られた」というのも、なんか嫌な思い出だな。

桜と鉄兜

『桜と鉄兜』

上野公園では、復員兵の爺さんが鉄兜を逆さにして、手足のない体を見世物に、桜見物の花見客から、お金をもらってた。僕も両親を急かしては、お金をあげた。年末にも登場すると両親は言ったが、見たことはなかった。

ウチの近所にも、片手のない爺さんが、夏は小倉アイスの最中、冬は大判焼きを焼いてる店を開いていた。ほかにもメニューには、焼きそばもあったが、これはキャベツが多かったので、あまり食べない。

その店の爺さんは、片手の先にアイスピックが付いており、器用に最中返したり、大判焼きにアイスピックを刺して、袋に詰めたりしていた。子供には優しかった。

友達が「あの爺さん戦争のとき、あの手で戦ったらしいぜ」と言うので、あんなアイスピックで刺されたら、そりゃ痛いだろうな…と、ビビった。

近所の爺さんは、あんな恐ろしげな武器を持っているのに優しかった。小学校の担任は、片足が義足だったのに、かけっこで勝ってなかった。

た。

上野公園の爺さんたちも、花見に浮かれることなく敬礼をしていた。

僕は当時、『009』という漫画が好きだった。

誰がために〜と言う、あの歌詞が好きだった。

ここでは、書けないらしいけど。

正直者

『正直者』

小学校では放課後、図工室で絵を画いたり、漫画を読んだり、僕らが好き勝手できた。

僕も、友達も、毎日のように、図工室で遊んでいたし、ほかにも何人か図工室にいた。

小学生の僕らは、まだ子供だったけど、クラスの女の子は、僕よりずっと大人だった。

「ねーねー、なーこはオナニーって知ってる？」

「知らない」

「えー本当に知らないの？」

クラスの女の子に馬鹿にされるのは、くやしいので「本当は知ってる」と言い返す。

クラスの女の子は「毎日やってるの？」と言うので、「毎日はやらない」と言った。

何の意味か解らなかったけど、女の子が照れくさそうに笑うので、勝った気がした。

こんな感じで、クラスの女の子は『マセガキ』で、僕には、よく解らない話をする。

友達の男の子が、クラスの女の子と仲良くしたいので、仕方なく付き合った。

ある日、図工室のガスストーブの火で、友達は、持ってきた『タバコ』を吸ってた。

クラスの女の子は、当然のように『タバコ』を分けてもらって、吸っていた。

「なーこ、お前も吸えよ」と言われたけど、僕は小児ぜんそくだから吸わなかった。

翌日、先生が「昨日、図工室で遊んでいた人は、手をあげてください」と言った。

僕が手をあげると、先生は「ちょっと前に来てください、ほかの人はいいない？」。

不思議なことに、僕しか手をあげなかった。

「なーこさん、なんで『タバコ』なんて吸ったの？　ほかに誰が吸ったの？」

と言われたけど、友達と約束していたから、友達のことは黙っていた。

「図工室にいた友達が、あなたの代わりに怒られたのよ。友達に謝りなさい」

と言われて立ち上がったのが、『タバコ』吸ってた友達と女の子だった。

約束は破れないので、僕は「ごめんなさい」と泣きながら謝った。

先生は「泣くなら『タバコ』なんて吸わないのよ、火事になったらどうするの？」

先生は、友達と女の子に泣きながら詫びる僕を見て、何も感じなかったのかな？

ジジババ

『ジジババ』

近所にある公園は、みかん山公園と呼ばれているけど、本当は違う名前なんだ。

公園の丘の上には昔、みかんの木が植えてあって、それを食べたりしたらしい。

みかんの木がないのに、みかん山公園なんて、ちよつと不思議な感じがした。

だから僕らは、両親に聞いたりして、色々と聞いて調べたのさ。

もう一つ、僕らには、謎の駄菓子屋『ジジババ』があつたんだ。なんと名前は『ジジババ』なのに婆さんが一人しかいないんだ。

毎日のように『ジジババ』に通っていたけれど、謎を深まるばかりだった。

子供は、適当な話をするから、本当のことが解らないけれど、友達の話は…

「昔は、ババアだけじゃなくて、ジジイもいたらしいぜ」

「あのババアは立ちションするんだ、本当はジジイなんだ」

「本当の名前は『立花屋』らしい・・・」

まあ爺さんが死んだから、婆さんだけになったんだろうと思ったんだけど、

僕の両親が子供のころから『ジジババ』には、婆さんしかいなかったらしい。

それでも近所の子供らには、『ジジババ』は人気の店だった。で、P T Aに目を付けられた。人気があり過ぎるのも問題だ。

ある日、『ジジババ』に行くと婆さんが、お金も取らずに駄菓子を配ってた。

そりゃ子供たちは喜んださ。駄菓子どころか、ゴムの蛇、ライダーカードも、

欲しい物は、ただ何でもくれた。

デモの略奪行為とか、あんな感じで子供たちが婆さんに群がった。僕は、あまりの盛況ぶりに、婆さんのことが心配になった。

「ジジイもないのに、ババア一人で、無茶し過ぎだろう？」

案の定、婆さんが張り切り過ぎたから『ジジババ』はお休みになった。

商店街で婆さんを見ると、いつ店が再開するのかと、見る度に聞いた。

卒業式

『卒業式』

男子校だったので、高校時代の思い出は、すごく退屈で、思い出すことがない。

女の子がいなかったし、入学した時から、もう卒業後の進路ばかり気にしてた。

生徒も下品だったし、先生はもっと下品だった。

生徒は、ほかの生徒を殴る。

先生は、殴った生徒を殴る。

三年間、殴ったり殴られたりの思い出しかない。

トイレには、吸い殻専用のバケツがあった。

教室のロッカーは卒業までに半分になった。

どんな罰なんだろう？

そんな三年間は、あっという間に終わった。想像より短い時間だった気がする。

卒業式の日、友達は「式が終わったら、お礼参りする」と言って計画を立てた。

卒業式が終わったら退室は、クラス順に校門で下級生に送り出される手はずだ。

異様な緊迫感があつた…僕らのクラスは『？E』、A～Iの真ん中辺り。

友達は、『？E』退室の放送と同時に、担任に襲い掛かる準備をし

ていた。

担任は、それを知らずに、三年間の思い出とか、辞めた連中の話をしていた。

『?E』退室の放送があったのに、担任は辞めた連中のことばかり話していた。

深夜の校舎からビデオデッキを盗んだ奴
修学旅行で、地元の高校生と喧嘩した奴
それに、開かずの踏切で死んじゃった奴

『?I』が退室しても担任は教壇を離れず、結局は放送の呼び出しも終わり。

下級生も校門からいなくなつて、担任だけが校門まで見送つてくれた…。

「アイツ、絶対にヤラれるって知ってたぜ…ビビッて泣いてたもんな（笑）」

友達は、強がりを書いていたけど、僕も、お前も、相当ビビってたぜ（苦笑）

たかが卒業式に、みんなビビり過ぎだつて（爆笑）

へび女

『へび女』

夏祭りには、見世物小屋がやってきて、お化け屋敷やへび女の出し物が行われた。

子供たちは、お化け屋敷を心待ちにしていたので、へび女が来るとガツカリした。

へび女とは、探検隊がジャングルで発見した、へびと生活をしていた女だった。

へび女は、言葉を話せず奇声を叫び、食べ物に鶏の生血、洋服は腰布一枚だけ。

「世にも奇怪なへび女、見て聞いて納得できないなら、お代はお返しします」

男は、いつも「お代はお返しします」と言っが、返したところを見たことがない。

夏祭り初日にへび女を見た友達に「ことしのへび女は、美人だった」と言った。

僕の見たへび女は、もうオバちゃんだったから、そう言われると見てみたい。

美人のへび女だったら、オッパイを見てみたいと思った。

「今夜は、犬を食うらしい！見世物小屋の裏に犬がいたぜ」

「鶏みたいに、首をはねるのかな？」

「へび女は、生血しか飲まねーんだから、首チョンパが見られるぞ！」

僕らは「首チョンパ、首チョンパ」と歌いながら、見世物小屋の犬を見に行った。

そこには、茶色の子犬が首輪で繋がれていた。それは、ない、酷過ぎだと思っただ。

あんな可愛い子犬の首をちょん切るなんて。

友達が「あの犬、逃がしてやろうぜ」と言うので、皆も賛同した。

子犬の首輪を外し、逃がしてやろうとすると、女の人が見世物小屋から出てきた。

女の方は、僕らを犬泥棒だと叱り付けたので、僕らは「犬を助けない」懇願した。

「その犬は、食べないわよ」

「嘘だ！　へび女は、犬を食べるつもりだ！」

犬は、捨て犬だったと言って、貰い手を見つけてきたら、犬をくれると言った。

女の方は「ついでに、犬を散歩してきてくれ」と、僕らに子犬を預けてくれた。

僕らは、子犬に『チョンパ』と名前を付けて、散歩しながら、貰い手を探した。

結局、犬の貰い手は見つからず、女の人に犬を戻しに行った。女の人を信用した。

「チョンパは、食べないですよ」

女の方は、子犬を抱きかかえると、僕らに「散歩のお駄賃だ」とお菓子をくれた。

僕らは、夏祭りの最終日まで『チヨンパ』の無事を確認しに見世物小屋に通った。

バタ子さん

『バタ子さん』

高校生のとき、バンド仲間の友達に誘われて上野の甘味処で厨房のバイトをした。バイト先には、金髪リーゼントのバイトがいて、社員より威張って一番偉かった。

金髪リーゼントは、僕ら厨房には優しかったが、給仕のバイトには冷たかった。給仕のバイトには、厨房の僕らより、ちょっとだけ上品なバイトが多かったが、それが気に食わなかったんだと思う。

殺伐として嫌だったけど、給仕のバイトの女子短大生が目当てで辞めなかった。男子校の僕には、四つか、五つくらい年上の短大生と話せる機会は貴重だった。女の人と話すことが、好きとか、嫌いとか、超越しちゃってた年頃ですから。

「おい！　なんか匂わねーか？」

バイトの更衣室で金髪リーゼントは、僕に話しかけてきた。まあ更衣室だから、衣服や白衣などの独特の臭いはあったが、べつに特別な臭いはしなかった。

「これ、アイツの臭いだろ？」と、金髪リーゼントは、短大生のコートを嗅いだ。

僕にも確認するように言うので、失礼かと思ったけど、逆らうと怖いので嗅いだ。

彼女の体臭だと思うと、コートは臭くなかった。

「アイツ『ワキガ』だぜ。今日からアイツのこと『チーズ』って呼ぼうぜ（笑）」

金髪リーゼントは、短大生に『チーズ』とか不名誉な呼び名を付けようとした。

そんな呼び名が短大生の耳に入ったら、バイトを辞めてしまつかもしれない。

「先輩、女の子に『チーズ』は、さすがに駄目ですよ」

「あーんっアイツはチーズ臭がするんだから、『チーズ』でいいだろよお？」

金髪リーゼントは、人殺しのような目で睨み付けた。ヤバイ殺されると思った。

「そうだ『バタ子さん』にしましょう！」

皆さんご存知の『チーズ』の飼い主『バタ子さん』だ。我ながらナイスな提案だ。

その日から短大を卒業するまで、彼女はバイト先で『バタ子さん』と呼ばれた。

短大生は、社会人になるので、バイトを辞めることになった。最後の日に、短大生は「なんで、私は『バタ子さん』なの？」

と、お別れ会の席で金髪リーゼントに聞いた。

「ああ『バタ子さん』は、なーこが付けた名前だからな…よく解らねー」

金髪リーゼントが敵前逃亡した。

少し酔っぱらった短大生は、僕の腕にしがみ付いて「教えてよ」と言った。

彼女は、酒臭かったし、金髪リーゼントの言うとおりだった。

愛想笑い

『愛想笑い』

僕の父親には、養子でもらった兄さんがいたらしい。

僕が生まれてすぐに死んでしまったので、その人の記憶は、全くない。

爺さんと婆さんは、僕の父親が生まれるまで、子供が出来なかったので、

知人から養子をもらったそうだ。でも、翌年、実子の父親が誕生した。

一気に、子供が二人になって生活が厳しくなったそうだ……これは余談。

終戦直後の昭和二〇年前半は、そうした養子が珍しくなかったらしい。

僕が、そんな話を聞かされたのは、僕自身にも養子の話があったから。

近所の酒屋の夫婦には、子供がいなかったので、僕に妹が出来たとき、

僕のことを『養子にほしい』と、ウチの爺さんに、頼んできたそうだった。

理由は「お酒を買いに来るとき、私たちを見て笑ったから……」だと言った。

そんな話を聞かされて、酒屋に行っても愛想笑いが出来なくなった。相変わらず酒屋の夫婦は、とても感じの良い接客をしてくれたけど。

その後も酒屋の夫婦には、子供が出来なかった。
けど、何処からか養子はいくらもなかったみたい。

ヘロリン村の先生

『ヘロリン村』

僕の掛りつけの医者は、頭が大きく体の小さかった僕を『チロリン村』と呼んでいた。昔テレビでやっていた人形劇の人形が、そんな感じだったから、そんな名前を付けた。

「『チロリン村』は、どうしたのかな？ 今日はお熱かな？」

僕は、あまり気に入らなかったけれど、医者が毎回言うから病気になる諦めていた。

そもそも僕は『チロリン村』を見たことがないので、なんか馬鹿にされてる気がした。

あの医者は、僕が嫌がっていると知っていたのだろうか？

医者は、僕が小学校を卒業する年、脑梗塞で頭を手術した。何日も病院を休む大手術。

小児ぜんそくの僕は、遠い病院に通院していたが、医者が治ってくれないかと思った。

遠くまで歩いていくのは、正直しんどかったから。

しばらくして『チロリン村』の医者は、無事に退院してウチの近所の病院が再開した。

けれど、医者は言葉が不自由になっていた。

「『ヘロリン村』は、どおしたのはな？ ひょうは、お熱かな？」

るれつが回っていない。医者なのに患者の僕が心配するほど、るれつが回っていない。

けれど、医者腕は衰えていないのか、病院の患者は、前にも増して多かったようだ。

それに『ヘロリン村』は、医者のオリジナルで、僕だけの呼び名になった。

僕の爺さんが夜中に倒れたとき、すぐ大きなカバンを持って医者が駆けつけてくれた。

夜中でも白衣で駆けつけてくれる近所の医者は、本当に頼りになった。

僕の中では、名医と言えば、ヘロリン村の先生だ。

だけれど、僕は健康になったので、以前より病院にいかなくなった。だから、いつの間にかヘロリン村の先生は、いなくなった。

一枚の写真

『一枚の写真』

僕に「オナニーって知ってる？」と聞いてきた女の子とは、同じ中学校に進学した。ほとんどの同級生が公立中学校に進学したので、当たり前といえば、当たり前の話。そこに運命的なものはありません。

女の子は、中学生になり茶髪になったし、言葉使いもスケ番みたいな感じになった。

僕の中では、スケ番と呼んでも差し障りのない人になった。怖いから本人には、絶対に言えないのだけけれど。

たけど昔のよしみで僕には、優しくった気がする…少なくとも殴られたことはない。

女の子には、馬鹿にもされたけれど、同じくらい助けてくれた気もする。

もちろん好きでもなかったが、嫌いじゃなかった。顔は可愛かった。ほかの男の子から、人気があったのかは、解らないけれど。

僕は、運動会で写真係に選ばれたことがある。

当時『ニCONF-?』と望遠レンズを持っていたからだ。

運動会では、学校から支給されたフィルムと自前のフィルム、腕章を付けていた。

僕は、支給されたフィルムで行事予定を撮り終わると、自前のフィルムに変えた。

ここから学校に提出する必要のない写真だから、友達とか中心に写真を撮った。

「ねー、なーこ。私のことも撮ってよ」

運動会が終わって片付けているとき、茶髪の女の子から言われた。写真を撮るのは、やぶさかではない。ただ、写真の写りが悪かったら怒られる。

それに何だか、運動会が終わったグラウンドで、女の子の写真を撮るのは恥ずかしい。

「いいから、撮りなさいよ！」

まあ「はい」以外の選択肢は、あるはずもないので、何枚か写真を撮ることにした。

女の子は、片付けの生徒が見ているのに、シャッターを切る度にポーズを付けた。

僕は、恥かしかったし、僕の好きな女の子も見えていると思うと、なんか嫌だった。

僕は、よほど慌てて撤収したのだろう。フィルムの後ろ数枚を感光してしまった。

慌てていた僕は、巻き戻す途中でカメラの蓋を開けてしまったのだ。何枚も撮ったはずの女の子の写真は、一枚しか写っていないかった。

僕は、その一枚だけを女の子に渡すことにした。

「ちょっと！　なんで一枚しか持って来ないのよ！　残りの写真もよこしなさいよ！」

あんなにポーズを決めていた女の子が、写真一枚だけでは、怒るの

も無理がない話。

あのとき、正直に「映っていなかった」と言えば、許してくれただろうか？

「あんだ、私の写真で何するつもりよ…やらしい」

「…いいわよ、私の写真、なーここにあげるわ」

女の子はアツサリ許してくれた。最後の一言は、顔を真っ赤にしていたが気にしない。

女の子は「私の写真」と言ったけど、そもそも撮った写真は、僕のものだけ。

まこと

『まこと』

妹は、沢山のヌイグルミを持っていたけど、その中にスヌーピーのヌイグルミがいた。

理由は解らないけど、そのスヌーピーのヌイグルミだけは、幼い僕が所有権を主張し、

妹とは、しばしば喧嘩になった。

あるとき妹からヌイグルミを取り上げるとき、強くヌイグルミの鼻を引っ張ったので、

鼻が取れてしまった。僕は、泣いて手が付けられなくなり、母さんが鼻の代わりにと、

毛糸でヌイグルミ用のチョッキを編んでくれた。

その日からスヌーピーは、『まこと』と名付けられて僕の物になった。

鼻のもげたヌイグルミは、妹の興味の対象外となったのだらう。

なぜ『まこと』か、もう理由は思い出せないけれど。

僕にとって『まこと』は、『ライナスの毛布』であり、手放すことが出来ない親友だ。

友達は、そんな僕の『まこと』への執着を知っていたので、ウチに遊びに来る度に、

僕から『まこと』を取り上げて、叩いたり、投げたりして、からかった…ド畜生だ。

なんでも長年持っている物は、手放し難くなるもので、僕は中学生

になるころまで、

『まこと』を机の上か、ときにベッドにも寝かせてやった。今考えると気持ち悪い。

ただ、捨てた記憶はないのに、『まこと』は、いつの間にかウチから姿を消していた。

たまに嫌なことがあると、思い出して探したけれど、本気で探してもいなかった。

『まこと』のチヨツキを編んでくれた僕の母さんは、物に執着をしない人だ。

執着心を捨てきれない僕は、母さんを冷たい人間だと思ってた。

いい人

『いい人』

僕の高校時代の友人は、親元を離れてアパートで一人暮らしをして
いる奴が多くいた。

両親を殴って追い出されてた奴、家族が多くて自分の部屋替わりに
使ってた奴、

理由は様々だったけど、そんな奴らのアパートは、すぐに溜り場
になった。

たぶん親友と呼んで差支えない友人には、親の職業上の理由で別居
している奴がいた。

そいつのアパートは、六畳一間だったが、大量のレーザーディスク
(アニメ)と、

大型テレビが置かれていた。あとよく解らない機械もいっぱい置い
てあった。

友人と遊んでいるとき、お父様に食事に誘われて、西新宿にある焼
肉屋に招待された。

友人は、自分の父親様だから焼肉屋でガツガツ注文していたが、ほ
かの客を無視して、

どんどん届く高級なお肉は、やはり友人の親の職業に関係していた
のだろう。

「息子を宜しくな」と言われたが、言われるまでもなく仲良くして
ました。

「オヤジのことは、気にしないで注文しよう」普通は気にすると思
います。

気にしている理由も、親の職業に関係しているのだが、友達のお父様に夕食を奢ってもらって遠慮するのも失礼なので、無理矢理に冷静を気取って、たらふく食った。

怖かったのは「お前ら、そんなに注文して残すなよ（笑）」と言われたときくらいで、あとは普通だった。ニコニコしてたし、息子の友達に危害を加えるはずもなかった。

高校を卒業した2、3年経った頃、その友人から「オヤジが死んじやった・・・」と、えらいアツサリした報告を受けた。殺^やられたのかと思ったが、自殺だった。

ピストル自殺だったので、顔は見ない方がいいと言われたので、お別れはしなかった。詳細は、色々あるので割愛します。

火葬場にある葬儀場には、いっぱい人がいたけれど、友人だけ一人で忙しそうだった。こんなときは、親戚や近所の人が、手伝いに来るものだが、これも職業上の理由かな。仕方がないので、そのまま告別式が終わるまで、泊り込みで葬儀を手伝った。

友人のお父様が遺骨になったとき、友人が一度も泣いてなかったの
で、こんなときに
聞くのも、なんか悪いかと思ったけれど、どうしても聞きたくなっ

て、聞いてみた。

「お前の父ちゃんと食った焼肉、あれ美味かったよな？」

「美味かったね、また食いに行こうぜ」

「お前の父ちゃん、いい人だったよな？」

「ヤク〇が、いい人なわけないじゃん」

「ぜんぜん泣かないけど、悲しくないの？」

「なーこが、いい人なんて言うまでは、悲しくなかったけどね」

なんだか、僕が友人を泣かしたみたいで、気まずかったから、負けじと泣いてみた。

僕ケンジ

『僕ケンジ』

爺さんが元気だった頃、爺さんと幼い僕は、二人で町内会の日帰り旅行に参加した。

爺さんは、僕に妹が出来るまで、とにかく色んなところに連れ回してくれたが、

僕自身は、その事実を覚えていない。

夜勤だった僕の父は、休日も寝てばかりで、遊んでもらった記憶など皆無だったので、

写真を見ても思い出せなかったけれど、爺さんに可愛がられていたらしいとの記憶が、

ある程度の年齢まで、僕を非行に走らせなかった。

写真以外の思い出は、僕がお気に入りだったシェリフバッジ。

西部劇で保安官が付けているアレ。

ウェスタン村で買ったお土産。

幼い僕は、あまり物を欲しがらない、子供だったのに、そのシェリフバッジだけは、

爺さんを殴った拳句に、手に入れたらしいが、当時八〇歳過ぎの老人を殴るなんて、

なんて無謀な子供だったのだろう。

爺さんが舌癌で死ぬ間際に「ケンジに殴られた」と、父の死んだ兄（爺さんの長男）

と間違えて、僕のことを呼んでいました。父の兄は、子供が出来な

かった祖父母が、
養子にもらってきた子供です。

「あるとき、殴ったの俺らしいよ…覚えてないんだけど」
「…お前、ケンジだろう？」

なんか悔しくって何度も「俺なーこだよ」と自己紹介したけれど、
もう最後の方は、
もう「ケンジでいいや」って。爺さんが、父の代わりをしていたの
は、マジだった。
最後は、自分の息子と間違っていたんだからね。

「僕ケンジ、お父さん、今まで有難うね…」

けれど、ちよつと変な話だね。僕と養子の伯父さんとは、血が繋が
ってないのにね。
似てるところは、爺さんを『本当の父親』のように扱ったことくら
いじゃん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7148v/>

生まれてきて、すいませんとは何事だ！？

2011年9月18日22時40分発行